

前回審議会(平成28年6月17日)での議論について(議事録抜粋)【発言順】

【発言順】

	委員名	委員発言内容	主な項目
1	生田委員 (20ページ)	<p>大阪市立大学のほうも昨年3月ですけど、都市防災教育研究センターという都市防災に関する研究教育を全学学部横断の組織でやろうと。縦割りじゃなくてですね。これは、なかなか全国的にいうと余りなくて、必ずしも防災を専門としていない先生が防災を考えたらどうなるのというところで、割合プロパーの人間には出てこない面白い視点が出てきております。</p> <p>その中で、当然ですけど、研究教育の中で地域との関わりというのはまち歩きとか、あるいはコミュニティ防災というのをキーワードに置いております。その中で、今取り組んでいるのは研究教育等の活動では、学生への教育に関しては、ちょうど長尾先生と今一緒にやっている文科省のCOC事業という、センター・オブ・コミュニティ事業というので、地域再生副専攻というのもやってまして、その中で長尾先生は別のテーマなんですけど、私のほうは防災のテーマで学生を地域に投入して大阪の防災を考えろということをやった、結構大変だなとみんな気付くんですが、そういうことをやったり、あるいは防災士の資格を取れるようなところで、学生のほうにもやっております。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・多様な主体 他主体との相互刺激</li> <li>・当事者意識 参加のきっかけづくり</li> </ul>
2	生田委員 (20ページ)	<p>地域の方も受け入れていまして、大阪市の南部の6区で地域の方を受け入れて、防災人材の育成ということで、大阪市には地域防災リーダーという制度があるわけなんですけど、それに加えてより一層いろいろと学びたい、コミュニティ防災という視点で学びたいという地域の方が結構いらっしゃいますので、そういう方は受け入れて、授業と実践的な演習を展開しております。そこに中学生なんかも入ってもらって、ちょうど藤井室長が平野区長だったときに、瓜破西中学校の地域の方と生徒さん、もう数十人集まっていたいただいて、アクティブラーニング型の対応訓練、まち歩きなんかも実施したりしています。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・多様な主体 学校園</li> </ul>
3	生田委員 (20ページ)	<p>うちの大学の中で文学部の先生にも防災教育研究センターに入ってもらっていて、その中で市民劇団、地域劇団みたいな劇団を作りまして、防災というあんまり、どうしてもちょっと年配の方中心になるんですが、そうじゃなくて子どもとか小学生から中学生、そしてその親世代、そういった若い方を巻き込んでいって、防災防災、教訓を学びましようじゃなくて、楽しみながらやっていって、その中で自然と今までなかったつながりをつくってもらおうというような劇団を作ったりですね。それもセンターの中の1つの活動でやっております。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・当事者意識 参加のきっかけづくり</li> </ul>
4	生田委員 (21ページ)	<p>当然、その中でこういった当事者意識とか防災教育なんかもやっていますと、人ごとだったりというのも当然あるわけで、そのあたりどう意識を高めてもらって、昔だったら地域力を高めてとか、あと最近だと地域のレジリエンスとか、そういう横文字も出てきていますけど、そうやって地域の防災力に対応、被害をまず減らす。で、被害を受けた後、どう速やかに回復していくのかということをやったり目指していきたいなと思っています。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・当事者意識 内発的動機付け</li> <li>・自律的な地域運営</li> </ul>

	委員名	委員発言内容	主な項目
5	生田委員 (21ページ)	<p>その中で、当然市民だけじゃなくてボランティア、社協さんを含めてボランティア、NPO、あと企業さん、当然消防、警察など、いろいろ入ってもらって、できれば協議会みたいな形でそれも組織しようというのを今考えております。コミュニティ防災の一番の基本は、フラットな立場で対等な目線で、同じテーブルでそういう防災に関わる方たちが話し合う場を作るというので、そういった場をやっぴり大阪でも作っていきなうということ、それは今ちょっとまだ模索中です。企業さんなんかにもたまには参加していただいております。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・多様な主体</li> <li>・連携協働 オープンな(開かれた)場</li> </ul>
6	生田委員 (21ページ)	<p>こちらに調査項目にあるような学校とか、社会福祉施設のほうでも福祉避難所の話がありますので。学校はもう防災教育の話で少し関わらせていただいております。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・多様な主体 学校園 社会福祉施設</li> </ul>
7	川口委員 (22ページ)	<p>学生の頃に立ち上げたものですから、なかなか苦労したところもありまして、当時はやりかけ出していたソーシャルビジネスという名のもとに、ハブチャリという、ホームレスの人の7割が自転車修理を得意とすることから大阪市内に現在18の拠点をもちまして、その拠点のどこで自転車を借りても返してもいいというレンタサイクルの進化版と呼ばれる仕組みを行って、現在180名ぐらいのホームレスの方を雇用し、そして路上から脱出することをお手伝いしているような団体になります。そういうことをやる中で、どうやったらホームレス問題を解決できるのか、またホームレス問題といいましても今ホームレスの人というのは減っているわけで、そういう中でもうちょっと大きく捉えて貧困問題、生活保護の問題、いろんな問題も絡み合いながら活動を推進していくという状態です。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・連携協働 コミュニティ・ビジネス(CB)、ソーシャル・ビジネス(SB)</li> </ul>
8	川口委員 (22ページ)	<p>ただ、アメリカのほうのNPOの事例とかを見ていると、数百億円の規模にNPO法人がなったとしても、結局地域の課題が解決できていないところから、今コレクティブ・インパクトという考え方がはやり出していて、1つのNPOだけじゃ結局のところ問題解決って難しいよねという中で、いろんなNPO法人、行政、企業さんを巻き込みながら課題を解決していくという、その中で一番重要になるのが共通の指標、数値的な指標を持つということなんです。貧困問題、貧困率を10%削減するとか、そういう同じ指標をいろんな団体、セクターを越えたところが一緒に掲げるという中で、本当に社会問題を解決しようという動きを見せていると。なので、Homedoor自身もそういったところを今後やっていけたらなというふうに思っておりますので、今回の検討の中でそういうコレクティブ・インパクト的な手法を用いて、どうやったら本気の課題解決を行政、市民、NPO、企業が担っていけるのかという数値指標なんかを考えていくのもいいんじゃないかなというふうにも思っています。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・連携協働 コレクティブ・インパクト</li> </ul>

	委員名	委員発言内容	主な項目
9	川口委員 (22ページ)	アメリカだとそういう数値指標を掲げたときにいろんな団体がセクターを越えて協働したということがあったんですけど、それを日本版に置きかえると一番大事になるのはお金らしいんですね。というのも、なかなか日本の、例えばNPO法人であっても違うNPO法人と一緒に担って何かやっていこうという動きって結構生まれにくいところがあるんですけども、そこを、例えば助成金を出す際に貧困問題、貧困率10%削減する団体に出しますとか、削減するプロジェクトに出しますみたいな、そういう打ち出し方をすると協働し始めたということが国際問題の解決の分野であったそうなので、そういったところも含めて今回審議できたらうれしいなと思っています。	・連携協働 財源の確保(資金調達)
10	古崎委員 (23ページ)	私の方は、こういう社会活動とは全然畑違いの、情報系ばりばりの、AIの研究をしている人間なんですが、ちょっと5年ほど前からオープンデータの推進の全国的なコンテスト開催の委員でやっておりまして、その当時は大阪はそういうところがすごい遅れておりましたので、ちょっと関西、負けているのが嫌だからというわけで、関西で活動を三、四年ほど前から始めたところ、オープンデータを社会問題解決にというような流れが相当出てきた関係から、大阪のイノベーションハブというところですが、オープンデータを使った何か世の中に役立つためのことができないかというような活動をするようになりました。ちょっとこの資料にあったものでいいますと、市民局さんがされていた大阪から考えるシビックテック、運営というか、普通にIT技術者としてそういうところに自分の技術が使えないかということで参加させていただいたりということをしていると、こういうところに呼んでいただけるようなことになりましたので、私の観点からいとなかなかそういう活動経験はすごい少ないほうなんですが、強みとしまして情報技術を、ただ単にホームページを作るとかそういうレベルの話でなくて、そもそも専門とやっていますのは情報をいかに、情報を整理するかと。整理して使えるようにするかというのが実は専門でやっておりますので、すごい複雑な、絡まったこういう課題を少しでも整理することをお役に立ちたいうえで、それをいわばICT関係のオープンデータのイベントに来るような人とNPO法人の方々を、まだすごい距離がある感じがしますので、その技術者の方でもこういう活動の役に立ちたいという人がせっかく集まっているのになかなかミスマッチで、それが一、二回の活動で終わってしまったたりということを少しでも是正というか、その間を埋めて、お互いが楽しくと言うと言葉が変かもしれませんが、技術者としても自分の技術を使える楽しさが社会の役に立てば、よりそういうところに貢献したいという感じがありますので、そのあたりを少しでもお手伝いできればと思っています。	・連携協働 ICT(情報通信技術)の利活用
11	豊嶋委員 (24ページ)	平成23年度に大阪市PTA協議会の副会長をさせていただいて、そのときに大阪市の24区のいろんなPTAの方たちと毎月会議を持って、会議では大阪市でのPTAの活動の推進をするんですけど、それとは別の時間にやはり情報共有の場がございまして、24区でいろんなことを取り組まれているのを情報共有したりして、自分の区に持ち帰って取り込めるものは取り込めるということも経験いたしまして、ちょうどそのときに近畿ブロックの理事もさせていただいて、近畿圏のPTAの方たちのいろんな、またその地域に根ざした活動なんかにも触れることができまして、やはり情報がたくさんあるほうが自分の地元を持って帰って活用できるものがたくさん選べる、セレクトできるということも感じましたので、いろんなところの場所に出ていくことって非常に大事ななというふうに思っております。	・連携協働 場と情報の提供

	委員名	委員発言内容	主な項目
12	豊嶋委員 (24ページ)	大阪市の生涯学習推進委員をさせていただいております。地域でのルーム授業とかに関わらせていただいております。そちらのほうは子どもにも関わりますし、地域のご年配の方も楽しみに来られていて、子どもも大人も楽しめるような活動を進めていくにはどんなふうにしたらいのかなというように地域の方と相談しながら進めているんですが、同じように中学校の元気アップ授業であるとか、小学校のステップアップ授業の方にも関わらせていただいて、子どもの現状というのは今でも、PTAを退任した後でも間近に見ることができますので、子どもがどんなふうな状況でどんなことを求めているのかというのは、多分皆さんよりは少し私のほうが距離が近いかなと思いますので、その辺のところの情報がちょっとでも提供できればなというふうには思っております。	<ul style="list-style-type: none"> <li>多様な主体</li> <li>子ども</li> </ul>
13	長尾委員 (25ページ)	私、1つ関心を持っているのは、 <u>コミュニティとかグループ的なこと、集団的なことでやることと社会の構成員全体でやるようなこととどう組み合わせるかということに、1つ、経済的なことでも社会的なことでも関心を持っていて、時には何でも大きな公共のように、こうでやれという話も出てくるし、コミュニティや集団が大事なんだという話があるんですが、特にラテンアメリカのこととかを考えていただくと、コミュニティだけが強くて駄目なんですね。一方、今フランスでいろいろ、フランスは完全に個人化して、個人化した上で社会構成員全体のルールってやっているけど、やっぱりそれだけで押し進めても駄目だというふうなことが言われて、今社会連帯とかいろいろやっていて、恐らくどういふふうに組み合わせるかというのが大事で、社会のルールとして全員でルールとか制度としてやるべきことと、むしろ集団ベースで考えるべきこととというのがあって、そういうことがこういうことにもいろいろつながってくるんじゃないかなということに関心を持っています。</u>	<ul style="list-style-type: none"> <li>大きな公共を担う活力ある地域社会づくり</li> <li>コミュニティと社会・制度の関わり (自助・共助・公助)</li> </ul>
14	長尾委員 (25ページ)	企業ということで、CSRとも関わって、イオンさんとかセブンイレブンさんとか、それから地域金融機関さんとかの話も出てきますが、改めて、過去、私が同僚と一緒にやっているのを思ったら、 <u>こういう活動は商店街とか地域のものづくりのちっちゃい会社の皆さん、結構昔からある程度やられている部分があるんですね。商店街関係がやっぱり防犯にもやっていると、それから今だと買い物手伝いとか、それから地域の工場のおじさんたちは結構PTAとかやっているんですね。</u> 実は私も上の子が幼稚園に入ったとき、PTA会長、急遽やらされたんですが、そのときの副園長に説得されたのは、私は住吉区にいるんですけど、かつてはやっぱり自営の方が多かったから担い手が多かったんだと。ただ、住吉区は、例えば東成とか生野に比べたら今は自営率は非常に下がっていますので、なり手がいないから何か時間の融通のつきそうな教員、大学教員、バスにも送っているような人ということで私になったんですが、その意味で大きな企業さんにも当然アプローチはあるけど、 <u>そういう部分もあるんじゃないかということと、それから幼稚園のときに思ったのは、今小学生で、昨日も駅に下の子を迎えに行っただんですが、幼稚園の方がお母さんもお父さんもえらい熱いんですよ。小学校になるとだんだんだんだん冷めていくような感じがあって、こういう地域活動、小学校地区をベースにするというのは理にかなっていると思いますが、その幼稚園の熱い段階でどうするのかなど。ただ、熱い人たちはその時点だとボイスが強過ぎることもあるので、適度に冷めているほうがいいかもしれないあたりは思うところではあります。</u>	<ul style="list-style-type: none"> <li>多様な主体</li> <li>企業(自営業、商店街、工場等)</li> <li>若い世代</li> </ul>

	委員名	委員発言内容	主な項目
15	中川委員 (26ページ)	<p>いろんな資料を見ましても、社会福祉協議会という言葉はどこにあるんかなと思って、あんまり出てこないわけで、長年にわたっているんな取組はしてきているつもりですけども、まだまだやっぱり認知していただいていないんかなとか、そういう反省もごさいます。ぜひ社協のほうもいろんなところとの協働とか、そういうことを考えて、今はいろんな取組をやっているつもりでございますので、ぜひこれからもよろしくお願ひ申し上げたいと思います。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>多様な主体</li> <li>社会福祉協議会</li> </ul>
16	久木委員 (27ページ)	<p>地域活動協議会ってほとんどの地域が立ち上がったと思うんですけど、なかなか温度差がありまして、同じ立ち上がった団体でもでこぼこがあちこちに出ておると。これは何でやろうということで、1つにはやっぱりなかなか本来の地域活動協議会、本来の意味がなかなか理解できていない。簡単に言えば補助金あるいは助成金が必要ということで、それだけでなった地域もたくさんあるんだろうということで、そこから一応議論というものをやっぱり始めていかないと難しいんかなということところが1つありますね。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>地域活動協議会</li> <li>形成の意義</li> </ul>
17	久木委員 (27ページ)	<p>今の助成金、補助金にしても、ある面でいうと器づくり、組織づくりだけで終わっている可能性、実はあるんじゃないかなと。実は、地域で組織作りましたよと。実際にその組織が動くようにどういう形で支援していくか。地域の場に非常にいろんな団体が入っておりますので、当然企業さんも入っている、学校も入っている、あるいはお寺や宗教団体も入っているということで、やはりそういう地域の中で調整力のある人が当然必要ですね。</p> <p>それと、やっぱり自主財源を作っていくかなあかん。そうすると、影響力がある人が必要ですよ。あと、当然ながら会計面に優れた人も要るでしょう。あるいは、地域の活動をきちっと広報していくかなあかん。広報戦略に優れた人も要るでしょう。そうした人が今区単位で何人おらんやろうということですね。本当に地域を支援しているんですよというんだけど、それがほんまに地域の支援になっとらんか、そこら辺から1回掘り下げる必要がまずあるのかなということですね。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>地域活動協議会</li> <li>担い手の確保</li> </ul>
18	久木委員 (28ページ)	<p>地域の中でやっぱり1つ問題になっているのは、なぜせないかんのかということがいまだやっぱり理解できていない。毎年毎年、予算的にもシーリングはかかってくる。大阪市にしてもやっぱり人材もだんだん減らしていかないかなあかん。きょうの新聞なんかにも載ってましたですね、人材削減。そうすると、人もお金も減っていく。そうなると、やっぱり必然的に、あんまり時間をかけてこれをやっている、そんな時間はないんだろうと。もっと早く急発進して地域課題に取り組んでいかなあかんだろうと。そういうときに、やっぱり自分たちが、地域が自主的に動くと大阪は駄目になりますよ、あなたの地域駄目になりますよ、ある面でそういうアナウンスがこれから必要なのかなと。もうちょっとやっぱり地域に危機感を持たせて、その中でやっぱり自主的に動いていただく、そういうことが必要なかなとも考えております。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>地域活動協議会</li> <li>当事者意識</li> </ul>

	委員名	委員発言内容	主な項目
19	藤原委員 (28ページ)	<p>私が今所属しているCSR推進部は、去年に新しく組織された部門です。その発足の背景には、先ほど述べました身だしなみを整える、美化するというような本業を通じ、社会的な課題の解決により一層お役立ちしていきたいという想いがあります。</p> <p>弊社のCSR活動における「コミュニティへの参画と発展寄与」の例としては、「知的障がい者の自立支援」を挙げることができます。知的障がい者の方に限りませんが、他人と触れ合うとき、身だしなみが整っていると、自分の中に勇気や自信を持つことができます。さらに、相手が自分に対して良い印象を持っていると感じると、勇気や自身が一層深まります。我々は、知的障がい者の方々にも勇気や自信をもって積極的に社会と交わっていただきたいという想いから、支援学校等で「身だしなみ教室」を開催させていただいております。具体的には、洗顔料、体臭防止剤、整髪料などの使い方、それを使うことによって得られる心地よさや楽しさを知っていただくため、体験実習講義をさせていただいております。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>多様な主体企業(本来事業での関わり)</li> </ul>
20	藤原委員 (29ページ)	<p>この「身だしなみ教室」についても、今のところは受動的な活動に留まっており、今後は能動的な活動にしていきたいと思っております。そのためには、<u>ステーキホルダー・ダイアログ(利害関係者との対話)を積極的に行い、その中から自分たちの新しい課題を抽出し、活動に反映していかなければならない</u>と考えております。</p> <p>少し話題が変わりますが、昨年度、CSR推進部が発足して早々にダイアログを開催し、当審議会の会長代理の永井さんに参画いただきました。その中で、CSRのR、<u>Responsibility(責任)は、Response(応答)する、Ability(能力)と解釈できることを学びました。我々は、ステーキホルダーダイアログを積極的に行い、その中で見つけた課題に対して迅速・的確に応答していきたい</u>と考えています。当審議会は様々な方々と対話できる貴重なチャンスであり、そのチャンスを活かしていきたいと思っておりますので、よろしくお願いいたします。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>連携協働 オープンな(開かれた)場(対話(当事者性の獲得))</li> </ul>
21	堀野委員 (30ページ)	<p>1つはやはりファイナンスという視点を少し入れないといけないかな。要はお金ですね。ご説明のときにありましたけど、得をするというのがやっぱり大阪人は非常に意識が強いです。得するイコール儲かるんかという話だと思うんですね。そういう部分のファイナンス、最近国とか東京のほうに行きますとソーシャルファイナンスという表現をよく使われています。こういったファイナンスと社会貢献みたいなのをどうつなぎあわせていくのか。それは通常の円のみならず、仮想通貨、ポイントであったりとか、そういったものももう少し視野に入れたりとか、海外の資金も流用するということであったりとか、あるいは企業の方でいいますと、やはり投資とか融資といった制度ですね。私ども、先日、大阪商工信用金庫さまと新たなそうしたビジネスローンのほうも組みさせていただきましたけれども、そういった寄付のみならず、いろんなお金の使い方というものをもう少し議論する必要があるんじゃないかなというふうに考えております。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>連携協働 資金調達</li> </ul>

	委員名	委員発言内容	主な項目
22	堀野委員 (30ページ)	<p>それに紐づくんですが、2つ目はやはりお金が入ってくると当然それがきちっと使えているかどうかという評価の部分ですね。ここが重要になってくるかと思えます。私ども、アワードというのを20年ずっとやらせていただいております、谷川局長も市長賞でいつも表彰に来ていただいておりますけども、やはり評価というものが今非常に盛んに叫ばれています。しかしその一方で、評価のための評価になってはいけななと思っております。例えば、ソーシャルインパクトボンドという制度が先日の骨太の方針でも、国の方針の中に盛り込まれています。そこでもしきりに評価と指標をどうするんだという議論がされていますけども、私は非常に危険だと思っております。というのは、<u>なぜかという、欠点を見つけてそこを潰すということも大事ですけども、こういう活動というのはむしろ評価を生かして、次の活動をさらに発展させるためにはどうしたらいいかというところが重要であって、何もこれに優劣をつけるということが評価ではないと思っております</u>ので、その辺の評価のあり方、さらに議論が必要かなと思っております。</p> <p>ちょっと余談になりますけども、実はある区の区政会議に出ていますけども、区政会議の中でも評価しているんですけど、全部自己評価なんです。行政が公平性と言いながら、そこは自己評価かというような感じなので、<u>やはり評価をするのは第三者機関がきちっと評価をする</u>という、これは恐らく中間支援組織が担うべき役割だと思っております、そういった機関も含め評価のあり方というものもきちっと考えないといけないかなと思っております。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・連携協働評価</li> </ul>
23	堀野委員 (31ページ)	<p>3点目が国際化の部分ですね。実は私、関西国際交流団体協議会というところの事務局長も今兼任でやっておりますけれども、大阪の南小学校という中央区にある小学校がありますけども、この小学校の小学生の50%近くがもう外国人にルーツを持つ子どもたちということなので、わざわざ海外に行かなくてももう本当に身近なところで国際化が進んでいます。ただ、今までのこの議論の中でそういった海外にルーツを持つ子どもたち、あるいは人たち、あるいは海外から来る人たち、あるいは海外の事業者、こういった人たちの視点というのは余りこれまで語られていなかったのではないかなと思っておりますので、<u>こういった国際化ですね、どういったふうに進めていくのか、あるいはそういった人たちも担い手としてどういったふうに参加していただくかということが大事かなと思っております。</u></p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・多様な主体 海外にルーツのある人</li> </ul>
24	堀野委員 (31ページ)	<p>私が最近ずっと伝えておりますけども、これからはネットワーキングではなくてノットワーキングというような表現を使わせていただいております。ネットワークというのは、もう結んでそれをほどこないようになんじがらめにするかという前提なんです、ノットというのは結び目という意味なので、どう結んでどうほどこしていくのかというふうに、柔軟に、あるところではつながって、あるところではほどこと。<u>今までの協働の議論というのは、どう強く結びつけるかの一方的な議論だったんですけども、一方でどうほどこしていくのか、あるいはどう解消していくのかということも重要な要素になってきているんじゃないかなと思うので、その辺の議論も踏まえて、またトラウマと戦いながらワーキングに参加させていただければというふう</u>に思っております。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・連携協働 つながりの形</li> </ul>

	委員名	委員発言内容	主な項目
25	増田委員 (32ページ)	<p>資料3のところにある趣旨の中で、皆さんはこの文言を見たときにどんな人の顔を思い出すかなというふうに今想像しています。私はやはり小学校の校下の中にいますので、この中で本当に困っている人、で、委員の方々皆さんが言った、こういったところにこういった情報を届けたいというときに人の顔が想像できるんですね。というぐらい、<u>小学校の中というのは本当に小さなお子さんからお年寄りの方がほぼ歩いていけるスペースにありながら、もう本当に何か世界の縮図のようにこんな困った人がいたり、こんな成功者がいたりというようなことが多々あると思います。</u></p> <p>ところが、今、地域活動協議会が形だけに終わってしまっている部分、場所が多いことに、とても悲しいなというふうに、残念だなというふうに思っています。ただ、こういったことをたくさん提言が出されたり形が作られても、それを上手に活用できるためには私たち一人一人が何をしなければいけないのかなということを3年ぐらい経って今感じています。その中で感じるのは、<u>自分の家庭の中、家族の中でどのぐらいコミュニケーションがとれているんだろうか、いろいろな情報を取り入れているんだろうかというところから始めていかなきゃいけないなと思っています。</u></p> <p>家族があって、そしたらあとは次のお隣。お隣の人と自分はどのぐらいの壁を作っちゃっているのかなというところで、その壁を取り除く。で、その人が心地よい壁の取り除き方、そういったことで自分のコミュニケーション力というのは養っていけるものだと思うので、私は団体、そういうふうに思っていると、小学校の校下でさえも何か余りにも漠然としていたり、漠としていたり、大きくなり過ぎていたりするので、もうその基本の基本、町会の中に班というのがあるんですけども、その班ぐらいのコミュニティ、そういったものがきちんとしていると防犯とか防災という面ではすごく強い地域づくりができているんです。</p> <p>地域活動協議会の中で私がとても大事に思っているのは、やっぱり防災と防犯ということで、それはどうしてかという、<u>地域の中でほとんどの時間を過ごしているのが、さっき委員の方からもたくさん言われていた、お子さんとお母さん、それからお年寄り。住民ではその人たちが24時間の間、地域の中で暮らしているというのがすごく多いので、その部分というのを強化をしていくということは大変重要だと思っています。</u>その為にも、自分がお隣の人、それからそのお隣の人のことをどのぐらい思いやっけていけるかなという思いで、私は今この2年間を過ごしていきたいと思っています。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・地域活動協議会 当事者意識</li> </ul>
26	永井会長代理 (33ページ)	<p>コミュニティのことでいいますと、非常に地域に根差した、増田委員がおっしゃられた本当に班レベルの地域から、地活協、それから社協さんが小地域でやっておられるという部分も、ローカルでのコミュニティも大事ですし、堀野さんや私たちはやっぱりテーマ型といいますか、多文化共生ですとか環境とか、あるいは地域の発達障害のある大人さんとか子どもさんとか、そういったテーマでやっぱりつながっていく中でコミュニティ、これは両方を見ていながら大阪市の今の<u>大変な状況、ここにどうやって力を合わせて解決に向かっているのか、こういったことをつながりから生み出していけるといいのかなというふうに感じております。</u></p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・連携協働 地縁型市民活動 団体とテーマ型市民 活動団体の連携協働</li> </ul>
27	永井会長代理 (33ページ)	<p>当事者意識はあれでしょうね、やっぱり困ったと、先ほど久木委員がおっしゃっていましたが、<u>何とかなるよというよりは、やばいぞと言うとあれですけども、このまま放っておくとますます、いや、この先どうなるよという、ちょっとは緊張感も持って、当事者意識の醸成ですよね。</u>一方で参加のしやすさとか気軽さとか大事なんですけど、それだけではなかなか俺の出番とか私の出番というふうになりにくいかなと思うので、<u>このままおいていたら大災害が来たらやばいねというようなことも含めて、何かそういった部分もうまく伝えながら当事者意識の醸成、ここからやっていけたらいいなと思っています。</u></p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・当事者意識 内発的動機付け (危機感)</li> </ul>

	委員名	委員発言内容	主な項目
28	新川会長 (33ページ)	<p>ごくごく身近な暮らしに根ざした視点から、しかし本当にたくさんの困り事があちらこちらに広がっていて、いわば社会の中のいろんな助けの手から漏れてしまっているところというのがもう一方では山ほどあって、それをどんなふうこれから一緒に考えていけるのか、そのあたりも皆様方のお話の中から出てきたかと思います。</p> <p>市民活動の推進、先ほど堀野委員からありましたけれども、楽市楽座というすばらしい私たちの発端がありました、それが本当に今もっともっと必要とされていると、そういう状況があると思います。こうした市民活動の推進をこれからどんなふうこの地でさらに大きく進めていくのか、そして今日の、今私たちがこれから解決をしなければならない皆さんの課題に向けて、この市民活動の推進ということをどういうふう組み立て直し続けていくことができるかというのが問われているんだろうというふうに思っております。皆さん方と一緒にしっかり考えていきたいと思っておりますので、よろしく願いいたします。</p>	<p>・大きな公共を担う活力ある地域社会づくり</p> <p>課題解決への取組</p>